

本多前學長・小島・赤沼教授を偲ぶ



本多主馬前學長略歴

明治六年九月六日 岐阜縣稻葉郡那加村山後莊嚴寺石井家に生る、名を主馬と稱す

明治三十年八月 眞宗大學本科卒業

明治三十年十二月 學師補の稱號を授與せらる

明治三十三年 眞宗大學研究科卒業

明治三十三年七月 學師の稱號を授與せらる

明治三十五年八月 眞宗大學教授に任ぜらる

明治三十八年四月 三重縣三重郡鹽濱村專福寺に入寺、本多と改姓す

改姓す

明治四十年三月 擬講の稱號を授與せらる、八月依願眞宗大學

教授を解かる

大正八年十二月 嗣講の稱號を授與せらる

昭和六年一月 侍董寮出仕に任ぜらる

昭和六年五月 大谷大學々部教授に任ぜられ、天台教學並に眞

宗學を講ず

昭和七年十二月 講師の稱號を授與せらる

昭和十二年九月 大谷大學々長に任ぜらる

昭和十三年二月三日 午后五時自坊に於て命終。「實相院釋現

英」なる院號法名を下附せらる

予の追憶

河野法雲

故の本多主馬師は予と同國美濃の出身にして、後に三重縣四日市に移轉し專福寺の住職となられた。其出生地は岐阜縣稻葉郡那加村字山後莊嚴寺の二男である。幼にして穎悟學才あり、是を以て組内の選拔生として、美濃母校(當時岐阜東別院内にあり)に入學し、研學歲を積み卒業後京都に出て本山の眞宗大學寮に學び、別科本科の業を卒へ、更に研究科に入りて餘業は天台の學を修む、然るに師が其研究科を終らば頃吾本山は石川舜台氏の寺務總長時代にして、白川黨の説を容れ眞宗大學を東京に移す事となり、遂に明治三十三年十月已後は一流の宗門大學は東京巢鴨の地に新校舍を建て移住せり、之に依りて予は從來教授の職を奉せしが、其時本多師は未だ始て

研究科を卒業せられて愈々これから教授の任に就かる、時なりき、依て共に東京に出て、眞大の教鞭を取ることゝなつた。是より予と本多師の交際は日に親密となりしなり、然るに師は予輩より年齢に於て六ツ程若かりし爲め隨て學問する學歷等も五六年の差あり、就職し教授となるも亦然り、而して今より回顧すれば當時丁度一種云ふべからざる艱難に遭遇し貧苦と戦ひしことあり、そは明治三十六・七年頃は吾本山は石川氏の放漫財政に依りて多大の負債を生じ、財政上に於ける吾本山は内外の信用を失墜し、殆ど窮乏の極に達し奈何ともすること不能な状態であつた。加之明治三十七年二月には日露の國交斷絶し終に宣戰の詔勅が下つた。此時に當り吾本山の財

政は一層窮迫し實に言ふに忍びざるものあり、斯る有様なれば吾人等東京巢鴨の地に移りて日尙淺くまだ土地人士の間に信用もなく知り邊等も少きに、僅かばかりの月々の給俸を京都より送り來らず爲に月々の米代に窮した次第教師の給俸すら如此延滞する事數月なれば、其他の諸經費は一切來らず、學校としてもはや其日が立行かざる有様なりし當時の學長は南條先生、其下に在る主幹は月見覺了氏なり、月見氏は京都に出馬し金策に奔走すれども容易に金を得ること能はず東京に歸るにも歸れず空しく京都に滞在すること五十日餘、吾人等は策の出所を知らず、全然兵糧攻めに逢ひ進退谷り其困難云べからず教授會を開て京都へ督促の電報を發せしも更に返事すら來らず爰に於て或は淺草本願寺に大草輪番を訪ひ或は單に同窓出身の教授のみ會合して將來眞宗大學の存在云何を議すること屢々なりし、其時同窓出身の教授として予の記憶に存するのは中島覺亮氏、上杉文秀氏、予と本多主馬氏（當時は姓を石井と云ふ）位が其主なるものなり、鬼頭覺道氏

と住田智見氏はその時東京に居られたか否や予判然せず（或は之より後に來らる、歟）此等同窓人が屢々會合を重ねた結果吾人等同窓の先輩として後輩の同窓に對して宥すく、此大學を閉鎖するに忍びず、若閉鎖するとせば吾人等實に不甲斐なき次第、何の面目ありて後人に見みえんや宜く憤然として立ち同心協力し以て一ヶ年間、之を支へんと衆議一決し無給勿論無報酬を以て自ら進で其任に當り書生々活に還り學生と共に學校内の寄宿舎に入り自炊生活を爲す覺悟を定めた、依て從來の借宅をたゞみ妻子を國許に歸らしめ、外來の教師並に同窓以外の内典の諸先生等は去り度き者は去れ、たゞ同窓教授丈け飽まで踏み留られ、云はゞ昔の私塾的の學舎風にしてなりとも一ヶ年丈けは支へ眞宗大學の閉鎖を同窓の力を以て維持せんと決心した、是れが即明治三十七年の七月であつた。依之上杉君本多君拙者などは先借家をたゞみ荷物_を國許へ送るに巢鴨の運送屋に交渉し其運搬の交渉人が即本多君自ら當られ其時は種々勞を取て下されたが、さ

て七月中旬より暑中休暇となりて國へ歸るにも旅費が皆が無く、又巢鴨の運送店員が不正實の奴つで東京で引合した運賃よりは國に歸りて高賃なことを申し來り岐阜の運送屋で荷物を請取るには違算と稱して高き賃錢を追徴せられたこれも逸話の一である、思へば實に彼時程困難貧苦に遭遇したことは終世忘るゝこと能はず殆ど空前絶後である。古諺に歡樂を俱にするは忘れ易し、艱難を俱に共にする者は忘れ難しと、實に然り斯様な譯で本多氏や上杉氏とは予は莫逆の友であつて何にか事あれば必ず當時の友人を思ひ出し終生相忘るゝ能はざるは先の如き艱苦を俱にせしが故である。

乾坤一轉幾多の年月を経て後京都に於て吾人等左の同窓即上杉、住田、本多等の諸氏と共に鴨川の旗亭に會合し東山の翠微を賞しつゝ晚餐を共にして、往時巢鴨時代を物語り一夕の歡を盡すに先の困難話しが出で、相共に今昔の感に堪へざるものがあつた、然るに再び得難き知己友人の上杉氏も本多氏も己に逝きて予獨り孤獨の身

となりて今に生存せり、實に往時を追懷すれば感慨無量である。吾宗門の施設は其後幾變遷を経て經濟上には昔に比して稍安泰なれど教學の將來としては彼巢鴨時代よりも尙一層危險に瀕する憂なしとせず、護法の青年志士よ幸に奮起せよ去るものは追ふべからず、將に來らんとするものは警めざるべからず嗚呼本多君今や呼べども應へず。

大谷學會の需めに依て予に本多師に關することを何になりとも書きて送れとの書信に接したから取敢へず胸中に思ふ所、其浮ぶに任せて蕪雜の言を叙すること此の如し。(昭和十三年六月三日記之)

本多主馬師の想ひ出

朝永三十郎

左の追悼文は去る二月八日、本學講堂に於て営まれた故本多前學長の追悼會に於ける朝永先生の弔辭である。當日、先生御病氣の爲、御出席かなはず、學監朽木廣覺師によつて代讀せられたものであるが、特に先生の御許しを乞うて、茲に、掲げたものである。

(編者誌)

本多師の御學問や御信仰に就いては私は何も申述べる資格はありません。唯一二の極めて外面的な想出話しを申述べて御弔辭に代へることにいたします。私が初めて本多師を知つたのは可成古いことであります。精密には記憶いたしません。慥かに明治三十一年から三十四年の間であつたに違ひない。此間に私は高倉通りを挟んであつた眞宗大學と貫練堂との間を往來して居られる師を度々御見かけいたしました。多分研究科に居られた時であつたと思ひます。言葉をかばしたことすら無いのであります。どういふものか可成あざやかに印象されて、

その印象が今日に残つて居ります。あの眞面目まじめなうちに何處か飄逸といつた様なところのある御風貌のせいではないかと思ひます。ところが、巢鴨時代に入つてからは、これは又どういふものか——私は明治三十四年より四十年まで六年間巢鴨の學校に出て居たのでありますが——師に就いて何等の印象も残つて居りません。學校の京都移轉後にも——私の出勤度數が極めて少かつたせいから——久しい間御目にかゝりませんでした。昭和六年頃であつたか、私が此學校に出る度數も殖え、又教授會などにも出席する様になつてから、頻繁に御目にかゝる様にな

りました。此時には以前にはなかつたあの顎あごの御髻など
が出来て居て、研究科時代の師とは大分違つた印象を受
けましたが、併しあの何處となく超脱的とでも言ふべき
風格は前後に共通であります。

さういふ様な譯で、私の見る本多師には最近でも尙ほ
研究科時代の師の面影が付き纏つて居るせいであるか—
これは何時か學長御就任の際の御挨拶にも申述べたの
でありましたが—歴代の學長中で一番若々しい様に私
には見えて、あの如何にも穩かな御風貌の奥に尙ほ充分
の浩氣が潜んで居る様に感ぜられましたので、尙ほ春秋
に富んで居られるからこれからのつくりと大に學校の爲
めに仕事をして下さる様にといふ私の衷心からの御願を
申上げたのであります。然るに思ひがけもなく急にか
様なことになつたことは、御一家の御哀惜は申すまでも
なく、宗門の爲め又は此學校の爲め誠に遺憾至極と申す
外ありません。私として本多師に就いて忘るゝことの出
来ないのは、あの物事に少しもこだはらない。春風駘蕩
とも言ふべきさらさらとした御人柄であります。私は巢

本多前學長・小島・赤沼教授を偲ぶ

鴨時代に、かの池原雅壽、石川了因などゝいふ學徳の高
い先生に接して、深い感銘を受けました。此兩先生は互
に非常に違つた風格を有つて居られましたが、どちらに
接してもおのづから頭が下り、思はず襟を正す様になつ
たことでありましたが、本多師よりして私が受ける感銘
は池原師より受けた其れと何處か似通つたものでありま
した。何かにつけて理窟つぼく野武士的な私の様なもの
でもあの様な淡々たる風格に接すると其まじぎごちなさがお
のづから和なまされて行く様な心持が致したことであり
ました。然るに今は幽明界を異にして、左様なことも出来
なくなつてしまいました。誠に心さびしい感に堪へませ
ん。一、二年前のことでありますが、丁度寒い頃であつた
と思ひますが、本多さんが教員室で私と御互様に段々か
らだの無理がきかなくなつたことなどをかこちながら、
私も早く教師など止めて自坊で「ラヂオ」でも聽いて靜か
に暮らしたいものだが、といふ様なことを例の様に少し首
を振りつゝ言はれたことを私ははつきりと記憶して居り
ます。此御話の中に私は靜穩な生活を好まれる師の性

向の一端を見ると共に、「ラヂオ」などを樂まれるといふことを初めて知つたことでありましたが、さてそれならば、どんなものを喜んで聽かれるのであらうか、といふ様なことを考へていろいろ想像を逞ふしたことであります。斯ういふ御性向より推して考ふれば、學長の位置に就かれたのも恐らく宗門教學の爲めに其性向を曲げてなされたことゝ御察し申されるのであります。そして御就任後は非常に職務に精勵せられ、御發病の際にも病をおして御出勤になつたといふ様なことを承つて見ると、あの平和な穩かな御風貌におのづから悲壯の氣が漂つて來る様に思浮べらるゝのであります。

取りとめもない感想を申述べて弔辭に代ふる次第であります。

本多主馬前學長 主要著書・論文目録

○著書

入出二門偈講義
天台宗綱要

法藏館
法藏館

○論文

法華經論貫(安居講本)
開目鈔講義(安居講本)
入出二門偈講義(安居講本)

大正六年
大正十五年
昭和十年

叡岳に於ける日蓮上人の系統と天台史

無盡燈七ノ五 明治二十五年

支那天台に於ける山家山外の評論一斑

無盡燈五ノ十二 明治三十三年

四明餘霞一五九、一六〇 明治三十四年

日蓮上人の折伏主義 無盡燈七ノ二 明治三十五年

日蓮と傳教 同 誌七ノ十 同 年

日蓮宗に於ける辯難書 同 誌七ノ十二 同 年

安國坊日與上人の不受不施義 同誌八ノ五 明治三十六年

天台宗の變遷と淨土、日蓮の教理

同 誌九ノ十二 明治三十七年

日宗の三大危難 同 誌十二ノ一 明治四十年

天台圓宗境智行と他力眞宗の行信行

同 誌二十二ノ十五 大正六年

○遺稿

天台夢旨・三大部圖記・日蓮宗綱要等

(その他は略す)

本多前學長・小島・赤沼教授を偲ぶ



小島惠見教授略歴

明治十三年四月二十日 尾張國葉栗郡瑞穂村頓受寺に生る

明治二十四年 瑞穂村尋常小學校卒業、直ちに漢學者鷺津順光の門に入る

明治四十二年七月 眞宗大學研究科卒業、九月眞宗大學囑託を命ぜらる

明治四十三年八月 擬講の稱號を授與せらる、九月眞宗大學教授を命ぜらる

明治四十四年九月 依願眞宗大學教授を解かる

大正元年九月 眞宗大谷大學教授を命ぜらる

大正八年九月 依願眞宗大谷大學教授を解かる

大正十年八月 名古屋眞宗専門學校教授となる

大正十五年六月 副講の稱號を授與せらる

昭和六年四月 眞宗専門學校教授辭任、五月大谷大學教授を命ぜらる

昭和十年六月 日華佛教研究會代表として、支那を歴訪

昭和十二年九月十九日 法話中腦溢血にて倒れ、入院、翌二十日、講師の稱號を授與せられ、同日夕病院にて、命終。同日二十四日「行徳院釋惠見」なる院號法名を下附せらる

故小島惠見教授を憶ふ

茜 部 忍

小島教授が重態であると云ふことを聞いたのは、九月二十日であつて、前々日まで學校で語り合ひ、元氣で國に歸られたのであるから、大抵は一時の發作であつて、一度は回復せらるゝこと、又さうあることを願ふて居たのに、引き續き計報に接し、前々から心配して居た最惡の事態が顯れたので、何とも云へぬ一種の衝撃を感じた次第である。

私が君に始めて遇ふたのは、母校が東京に移轉せられ、巢鴨の地に開校せられた前後であつて、君は大抱負に燃えた豫科二年生として、私は希望に輝ける新入生としてゝあつた。それから學校が東京にある間、滿十ヶ年共に佛敎の道にいそしみ、君の親交を得たものである。殊更にも研究院時代は其研究題目が共に性相であつた爲か、

互にはけましはけまされ、小島の眞興、音羽の明詮を氣取るなど随分無邪氣に又世間知らずの有様であつて、今から思ふと自分ながら可笑しき次第である。然し此のやうに研究題目に對して、一種の信念と崇敬とを以て暮直に進んだ爲に、唯我に付きて一種得る事ありて、物の見方、考へ方に一の指針が得られ、又眞宗に於て廢し捨てよと教へらるゝ所謂自力聖道の義に付きても、危なげなく惜しげなく、當然のこととして廢捨し得る様になつたは大きい所得と思ふ。母校移西後は君と道を別にしたる爲め、常に遇ふと云ふ譯には行かなかつたが、郷里が餘り距りて居ない爲に舊交を暖むる機會も少くなかつた、昭和六年以後共に母校に勤むることゝなつて、一方ならざる親交を得て居たが、今は夫れも叶はぬことゝなつた。

君は資性極めて濃厚圓滿であつて、常に和顔愛語、能く人の言を聞きて感情を交へず、其人々々の特長を認められたから私の如きも永き間君の親交を得た譯である。又、君は智識中心、確實を第一とする所謂一般的の學者でなく、佛教の學者であつた、佛教を研究題目とすると云ふ意味でなく、佛教々學殊更にも性相教學を以て自己向上の資糧指南とせられた意味での學者である。古聖が其一生の全力を盡くして主張せられたる教學を單に研究するのみでなく、夫れに依りて教祖の胸奥に入り、其精神を把握して自己向上修養の一面とせられた、夫れ故に廣く知ると云ふよりは深く知るにあつた、其結果として、性相の學風は君の性格に具現せらるゝ様になつた。君は極めて包容的で寛容であつた、氣樂に話をする事が出來た、是れは自分の主義意見を以て人を律するのではなく、自他夫れ々の特長と價値を認むる餘裕があつて、矛盾のなきやう、無理のなきやうと、心がけられたに依るものであつて、全く性相阿毘達磨學風の具現である。

本多前學長・小島・赤沼教授を偲ぶ

又君は周圍環境に適應して各方面に功績を残された、君の一生には色々の波瀾があつた、然かし君は業繫を諦觀して不服不滿を顯はさず、到る處平和であつた、是れ阿頼耶種子生の諦觀に依るものである。又君は感應の世界に生きられた。性相では自己の世界は自己唯識の顯現なるも、他の佛菩薩の感應利益は限りなく受くるものとする、性相に於ける向上の道は此感應護持を第一とする、修行の始、受戒の時は十方三世の諸佛世尊、已入大地の諸菩薩衆に啓白し請證して、其の善念憐愍に依りて佛道を増長せんことを願ひ、諸佛菩薩のまつたゝ中にて修行すると云ふ信念に立つものである、君は此佛菩薩の護念は今や無條件に、還相の大用と、冥衆護持の益を味ふ事に依りて知り得らるゝと喜びて夫れを眞宗教義の藥籠中に攝められた。今や君は地位をかへて、入大地の菩薩として私を眷念憐愍せられて居ることと思ふ。茲に小島教授を憶ふて聊か所感を記りました。以上

小島先生のことも

可西大秀

小島先生の御訃音を聞いたのは、昨年九月二十一日のことであつた。あまり速急なので實に驚いたことであつた。それは、先生御逝去の一兩日以前の十八日、即ち土曜日の午前、大學の教授室に於いて親しく御讐咳に接し、永い暑中休暇後始めての御面接のことであつたから、休暇中に於いての旅行談や、御研究のこと等について、種々四方山の御話を聞かせていたゞき、御指導をも受けたことである。而して、その日は校門の處まで談笑しながら御伴して出てお別れしたのであつたからである。それで御逝去と聞いても眞實とは思はれず、先生の御逝去のことを知らせて居る學校の掲示板を數回見なほしたことであつた。聞くところに依れば、御逝去になつた一兩日前、即ち十九日の正午頃は、健かな相で名古屋市名古屋内江に在る檀家、岩田公儀氏方で御講話をして居られたのであるが、その講話は終が結ばれず、途中で突然倒

れたので、そのまゝ近隣に在る好生館病院に御入院になり、腦溢血であつたので、此處で靜養して居られたのであつたが、その效もなく、そのまゝで、翌二十日の午後六時半頃、靜かに命終還歸西せられたとのことである。此ことを聞き、身を僧籍に置き、信徒教導の使命を負ふて一寺を領かり、その住持としての職を奉じて居るものが、檀徒に教法を説きながら倒れ、檀徒の人達に看護されて逝去すると云ふことは、武士が戦場の花と散るにも比すべきものであること思ひ、先生の命終は尊い美しいお相であつたと思ふことである。

傳へ聞く處に依れば、先生の出生地は、愛知縣葉栗郡淺井町大字尾關西本郷十五番地頓受寺であつて、小島懋誠師の第二男として生れられ、その年時明治十三年四月十二日で得度せられたのは十四歳、即ち明治二十六年五月二十五日であつた。小島家を繼ぐべき長兄のお方が天

折されたので、感誠師の二男として生れられた先生は、小島家を継ぎ、且つ頓受寺の住職をも繼がれた。それは明治四十四年七月のことであつた。それ以後、御逝去の時まで、頓受寺の住職として、寺門の經營と檀信徒の指導とに努められたことである。その間に於いて、時折には大衆布教の壇上に登りて獅子吼し、相當効果を收めて居られたとも聞いて居る。

斯様に先生は、御一生に於いては、教化に、また寺門經營に努力して、何れの方面に於いても相當の効果を擧げられたことであるが。然し、斯様な動きは、先生の境遇や周圍の事情等から、止むを得ず爲されたことであつて、自發的に此方面のことに携はるようになつたものでなかつたであらうと思ふ。それは、平生のお生活振りを觀て居つても解ることである。従つて、斯うした方面に於いての先生の動きの中には、先生の眞實のお姿が現はれて居らないと思ふ。學究者としての先生の上こそ、眞實のお姿が現はれてあり、私共の眼に映じた先生のお姿である。それは、先生の後半生の大部分が、宗團

本多前學長・小島・赤沼教授を偲ぶ

内に於ける學事に關與し、宗門の子弟の指導と教養のことに携はりつゝ、學究に没頭して居られ、その間に於いて寺門の經營に努め、招請に應じて布教壇上に立つて教法の宣傳に従ふて居られたからである。即ち、先生が、眞宗大學の本科を卒へられたのは明治三十八年七月であり、研究科を卒へられたのは明治四十二年七月であつたが、その歳の九月眞宗大學の教授囑託として教壇に立たれた。その時本科に於いて性相史を、豫科に於いて成唯識論を講ぜられた。私共は豫科生であつたから成唯識論を聴講したことであるが、何時も笑顔で講義して行かれるので、軟かな感じの與へる先生であつたことを、今なほ心覺えにして居る。處が此時在職約二ヶ年で辭職し故山に歸られることとなり、私共はお別れしたことがある。それは明治四十四年の六月眞宗大學移西のことが決定せられ、九月京都に移轉し眞宗大谷大學と改稱せられた、その時の問題に關係して退職せられたのである。それから二年後の大正元年に、眞宗大學に教授として職を奉ぜられることとなり、主として性相學特に唯識を講じて居

られたが、此時は在職約八ヶ年にして退職せられた。然しその直後の大正十年八月眞宗専門學校に奉職し、論註、玄義分、六要鈔、七祖概要、三經交際、性相要旨等を講じて居られたが、昭和六年に更に大谷大學に奉職せられることとなり、佛教學講座を擔任し、唯識教學を講じて居られたのであるが、死の直前まで此ことが續いたのである。されば、眞宗大學の研究科を卒へられてから、故山に歸臥し宗門の學事に關係せられなかつた期間と云ふものは僅かに兩三年の間であつて、其他は命終の時まで學徒の教養のことに従ふて居られ、學究を捨てられなかつたのであるから、學究生活で一生を終られたと云ふても過言でないと思ふ。更に、先生の學究生活の跡を眺めて觀るに、地方からの招請を受けて講習會なんかに望まれる際には、宗典關係の執持鈔、後世物語、論註などを講ぜられたこともあつたから、宗學の造詣も深かつたことは言ふまでもないことであるが、大學の講壇に立たれた場合は、時には異例がないこともないが、講ぜられたものゝ多くは、性相學、特に唯識教學に關係するもの

に限定されて居つたことを思ひ。昭和三年の夏安居の際には法相心要鈔を講じ蘊蓄を傾けて居られ、昭和十年七月日華佛敎研究會代表として渡支の際も唯識を講じて居られ、残された著述も「唯識三類境講義」、「成唯識論」、「法相心要錄講錄」等であることから、知られるやうに佛敎學と云ふても唯識敎學の研究、尙ほ是れを明確に云へば、支那譯を中心とし、支那佛敎としての唯識敎學には造詣が深く、蘊奥を極めて居られ、現今佛敎々學界に於ける一人者であつたと思ふことである。而して、此唯識敎學の研鑽は、古き時代に於いての敎育方法の如き私塾に於いてなされたものではない。大谷派としては、當時既に眞宗大學條例が發布せられ、修業年限五ヶ年の専門學校が設立せられて居つたから、組織的なる學校敎育によつて、整然と順序を逐ふて研鑽の歩を進められたものである。従つて、古き時代の如くに、その學系は明確に言ふことは出来ない。若し強いて云ふならば、其頃齋藤唯信先生等が、眞宗大學に於いて敎鞭をとつて居られたから、齋藤先生等から薰陶を受け、その學風を傳へられたもの

と思ふ、而して、豊満春洞先生からも指導を受けて居られた。

斯様に、深い學識を以て先生は、佛教々學界、特に眞宗大谷派の學界に臨んで、學徒の指導に努められ、布教壇上にて獅子吼して大衆教化に相當効果を擧げて居られた。而して大正十五年六月に嗣講の學階が授けられ、更に昭和十二年九月には講師の稱號を授けられ、その學徳は大谷派の内外に重きをなしたことであつたが、今は淨穢境を異にすることゝなり、總べてが追憶の物語である。

思ひ返して觀るに、先生は、至極温厚な方であつて人と對談される時は常時に微笑を浮べつゝ談られるので、その態度には剛直な處がなく、實に慈愛に満ちた。軟かな感銘を與へられたので、角もなく親しみ易いお方であつた。如何なることにも、常に謙讓の態度をとつて居られたので、技能に於いても學徳に於いても、私共も明確に知らない何もものかも持つて居られたやうである。學究生活の傍らに、時折爲された一般大衆に對する布教に於いても相當効果を收めて居られ、得意として居られたこと

本多前學長・小島・赤沼教授を偲ぶ

と、聞くが、それを外面に現はされなかつたこともその一つである。趣味嗜好に於いても、私共の知らないものがあつたやうである。よつて、私共の眼に映じた先生は純粹の學徒として學究にのみ没頭せられ、晩年には眞宗教學を究めることに努めて居られたが、御一生を通じて唯識教學の攻究に努めて居られたお方のようであつた。此處に先生の行跡の一端を記して、追憶の言に代へた次第である。最後に先生の詠藻の一二を記し、その御生涯を偲び擱筆することにする。

富士登山の際に

老鶯と念佛の聲に富士登山

茶に親しみつゝ。

汲むほどに泉は深し法の水

渡支の際太通にて

殘月や甲板涼し揚子江

小島惠見教授 著書・論文目録

著書

- 一、唯識三類境要義 大正三年
- 二、編著「新編成唯識論」 大正十一年
- 三、弘法大師の信仰 大正十二年
- 四、法相心要鈔講録(安居講本) 昭和三年
- 五、後世物語聞書略解 昭和五年
- 六、淨土論十講 昭和十二年

論文

- 一、慈惠大師の一乘觀 無盡燈 九卷 五號
- 二、唯識論大綱を読む 同 十四卷十一號
- 三、瑜伽師地論の作者 同 十四卷十二號
- 四、無所適莫 同 十五卷 一號
- 五、唯識談片 同 十五卷 七號
- 六、道棟と舊譯の唯識三十論 同 十五卷十一號
- 七、親鸞聖人の神祇觀 同 十六卷二・四號
- 八、精進道の教訓 同 十六卷 六號
- 九、瀧州大雲寺の懸沼 同 十八卷 四號

- 十、護法菩薩と眞諦三藏との交渉 同 十九卷 三號
- 十一、日本法相宗の南北相違 同 二十卷二・八號
- 十二、異譯の唯識教系 同 二十三卷六・七號
- 十三、曇鸞大師と眞宗 眞宗學報 一卷
- 十四、民國現代の唯識教學 日華佛教研會年報 第一年
- 十五、伽陀偈文講義 眞宗通信講義 大正五年
- 十六、心光攝護の益に就て 法藏四八三 現世利益號
- 十七、極樂の依正二報に就て 同 四九五 阿彌陀經奉讚號
- 十八、御文一帖目第二通講讀 同 五〇〇 御文讚讀號
- 十九、三國七祖の傳統に就て 同 五〇七 傳統と得度號
- 二十、眞宗と祈禱 同 五三一 生活と信仰號
- 二十一、現生十益に就て 講壇七卷十號 現世利益檢討號

遺稿

唯識學概論・唯識教學史・性相要旨・論註大綱・教行信證序説・六要鈔・玄義分講義・三經交際・七祖概要等

本多前學長・小島・赤沼教授を偲ぶ



赤沼智善教授略歴

明治十七年八月二十五日 新潟縣長岡市上田町願淨寺に生る

明治四十一年七月 眞宗大谷大學本科卒業

明治四十一年八月 學師の稱號を授與せらる

明治四十二年 山邊智學氏と共に浩々洞同人となり、尙羊社を起す

大正三年七月 眞宗大谷大學研究科卒業

大正三年八月 擬講の稱號を授與せらる

大正四年三月 印度及び英國へ留學を命ぜらる、錫蘭の古倫母に一年半、英京倫敦に二年半滞在、巴利語及び原始佛教學を研究す

大正八年六月 歸朝、時に三十六歳

大正八年九月 眞宗大谷大學教授に任ぜられ、原始佛教學並に

巴利語を講ず

大正十四年 山邊智學氏と共に本津無庵氏の佛敎協會事業に參

加

大正十五年六月 嗣講の稱號を授與せらる

昭和二年四月 大谷大學圖書館長に兼任せらる

昭和六年四月 依願役務を免ぜらる

昭和八年四月 大谷大學々部教授に任ぜられ、原始佛敎學講座並に巴利語講座を擔任す

昭和十二年十一月三十日 午前六時自坊に於て逝去す

「樹心院釋智善」なる院號法名を下附せらる

赤沼教授のことゝいも

林 五 邦

○ 赤沼教授が越後長岡の自坊で、それこそ忽然として逝かれてから、はや半歳の月日が流れた。その間の慌たしい走馬燈のやうな内外の推移に、「赤沼君がゐたら……」とは、知友の間に幾度か漏らされた嘆聲であつた。

赤沼教授の學界への不朽の業績や、その堅實にして細緻、周到な學風や、護法の人として、人間赤沼としての風格やについては、先に「家庭と佛教」誌や、「佛教研究」が追悼號を出して、諸家の執筆を煩したことであり、筆者も亦教授の追憶の糸を繰つたことであつた。今は乞はれるまゝに落穂の二三をとりとめもなく拾ふことゝする。

○ 沈思寡黙で剛膽なあの風貌からして、教授は随分と痛くもない腹を探ぐられたもので、殊に晩年はまことにお

氣の毒な思ひをさせることが多かつた。けれど教授程宗門を愛し、學園を熱愛された方も珍らしいことであらう。犀利な眼からしての現實に即しての、ものの看透しと對處、まことに教授は宗門にはなくてはならぬ人であつた。殊に多事多難の折柄、一入ほに惜しまれるところであり、何にも出来なくても、ゐてさへくれれたら、たゞ赤沼があるといふだけでも、どんなに力になることであらうに……」との聲の漏らされることによつても、教授を失ふことは宗園の上にも、學園の上にもいかに大きな損失であるかゞ知られるところである。「何かと心配をするものは、いつも顔觸れがきまつてをり、何だ、かだと引き出されて、たまつたものでない」とは、よく教授の愚痴られたところであつた。眞に宗園を愛し、學園を愛する人の次第に失はれてゆくといふことは、これも世相の然らしめることであらうが、教授のなき今いひしれぬ淋し

い思ひをすることである。

○ 情誼に厚い教授はよく後進の指導誘掖とともに、その身邊のことにも、随分と面倒を見られたことであつた。むつつりやの、とりつく島のなさそうなあの風貌の奥底には、いつも情誼に熱い涙が光つてゐたのであつた。嵐の後に再び歸學されることも、教授としては容易に動かれそうもなかつたことである。「それが學園の上に捨石となることなら……」と漸くに昭和八年四月再び講壇に立たれたのであるが、昨年二月父君の往生に又もや辭意を漏らされ、翻意に一苦勞させられたことであつたが、「目的の半を達したことであるから……」とは、昨夏の危禍の見舞ひの折にも漏らされ「後々のものが困るといふことなら……」と、學位論文の提出を承諾して、その整理にとりかゝられて間もない長逝となつたことも、心残りの限りである。不自由な假寓の佗び住ひの机上には「アツタサーリー」の譯稿がそのまゝとなり、自坊の土藏の中の書齋の机上にひろげられた原稿も、當時涙の

本多前學長・小島・赤沼教授を偲ぶ

たねであつた。

○ 長男智映君を失はれたことが、大學の嵐の歳のことでもあつた加減が、教授の上には餘程の大きな衝動であつたやうに思はれる。あれやこれやの内外の數々の心痛のことでも、以來意氣消沈のやうにも見受けられたが、亡き智映君を偲ぶすがにと、後進のもののあることの企劃も、整理にも及ばずして教授の長逝を見たことも殘念なことである。「これが出来れば置土産として自坊に歸臥する」とも、その頃いつてをられたことであつた。

○ 時代の推移と動向とは、いつも細心な注意を拂ふて、佛教の立場、宗團としては如何に善處すべきかに留意してをられたが、木津無庵氏の佛教協會の事業と運動とに早くより参加せられ、殊に昨夏有志によつての各部門よりの神の概念、神社問題の研究の立案、計劃の肝煎をなされたことであるが、教授はまことによき立案、企劃者であり、またその寡言が千鈞の重きをなしたことも、教授の時代を看る鋭い眼と、細心な留意と、周密な用意

とによるものである。

○ 教授は碁には随分と熱心なものであつた。中學生の頃

からのものであるそうであるが、それこそ鬪志満々たるものであつた。碁に夜を徹することも珍らしくなかつたやうである。盆栽を愛し、茶事に凝り出されたのは、數年前からのことのやうである。一昨年の秋、教授に誘はれるまゝに、阿部恵水氏邸に菊觀に出かけて、茶室に通されて困り抜いたが、歸途に車中で、「お茶を喫むこと位は知つてゐなくては……」といはれたものである。

教授はお嬢さんの茶事にはそれは熱心なもので、宗徧流全盛の郷里に、裏千家をとの考へもあつてのことであらうが、よく茶會には御夫妻で出かけられたものであり、それとなしに道具も蒐めてゐられたやうであつた。「梅尾の明恵上人は釋尊思慕のあまりに、渡印をさへ企てられたことであるから、明恵上人の書を手に入れ、梅尾の竹林の竹で茶杓を造りたいものだが……」ともいつてをられたことであつた。昨夏危禰を見舞ふたときに、久し

振りにお茶をと、母堂令室とともに相伴したことも、長岡の川開きの花火を縁側に蚊を追ひながらともぐらゝに興じたことも、ついこの間のことのやうに思はれる。お嬢さんのために自坊に茶室を建てることの設計を、自分でしてゐられたそうであるが、ニコノとしてお嬢さんの點前を眺めてゐられた教授の家庭の人としての面影が今も尙憶はれることである。

○ 「嶮難世平等」とはよく教授の口にもせられ、揮毫もせられたことであるが、教授の五十四年の生涯、殊に昭和六年の嵐の前後よりしての教授の生活はまことに嶮難の世に平等を行するの忍苦の生活そのものであつたやうに思はれる。教授をして長逝を早からしめたことも、宗團と學園と、身邊の内外の事情が、あまりに教授をして心勞せしめたからのやうに思はれる。教授の不朽の業績は近く「赤沼智善論文集」として刊行の運びとなつてゐるが、今はその刊行がせめてもの教授の追憶のよすがとすべきものであらう。(昭和十三・六・三)

赤沼先生の思ひ出

古 海 香 雲

大正十年四月私が大谷大學へ入學しました時は、丁度あの「阿含の佛教」の著述成つた先生が之れを佛典基礎學乙に使用せられた年であります。當時新潟縣出身の教授は齋藤先生を始め赤沼・山邊・金子・曾我・安富等實に多數の先生が居られて賑つたのであります。然るに昭和五・六年の變動に辭職・移動・退職・等相繼ぎ、殆んど其の跡を斷つたのであります。昭和八年先生は復職せられ、唯一の燈臺の如く光を放つたのであります。其の大きな存在が今在さず、何とも云へぬ寂寥を感じます。郷國を同じくする私は大正十年以來、御指導と御高誼とを蒙つて來ました。殊に昨年先生は嚴父の御逝去に由り大學を辭職せんとせられたが、當局の懇請に暫らく踏止まるる決意をされました。然し此と共に御家族は故郷へ歸へざるることとなり、先生は單身不自由な御生活を始めるることとなりました。折柄私も上京することとなり、

先生の御依頼により宅の半分を御借りしたのですが、訪客に廂を貸して母屋を取られたやうだと先生に戯談を交はされた方もあつたやうに、先生御在世最後の半年と云ふに御氣の毒に堪へなかつたのであります。斯くて私は先生最後の半年を同じ屋根の下に送らせていただきました。此の様な不自由な御生活にも拘らず、先生の努力力行は私共若輩が慙愧たるものがある位、毎夜午前一時前には殆んど息まれることはなかつた。御若い時の如何に勉強されたかは想像にあまりあることで、先生の書棚に御留學中阿含經を翻譯されたノートが數十冊並んで居つたのでも其の一斑が伺へます。諸種の偉大な業績は斯くして生み出されたのだと尊く思はれます。七月不慮の御負傷後、九月十六日御歸洛されましたが、其折は御病氣猶癒えぬのに、依然として力學を繼續されてゐたので、竊に憂へて居りましたが、頑健を以て通された先生に斯

く急變あるとは誰か豫期せられやう。先生は嚴父が御逝去されてからは自坊檀家に對する責任を非常に強く感ぜられて居た様です。昨年四月上京以後、あの遠距離を月に二回無理をして歸郷法務に就かれました。而も其の疲勞の中を夜行列車を以て朝京都着直ちに登學八時より講義を開始してゆかれました。御往生の數日前に尙檀家を廻られた處より見ても弘法の念の強きを伺はれます。先生に更に數年の生を假さば必ずや檀家のものも先生も御満足なされたことであらうと、此點も甚だ惜しく思ひます。先生のところへは不斷に來客がありました。何んなに忙しい折にも、良く應對せられ、嫌な顔一つなさらなかつた。談が學事及宗門の將來に關すれば盡くることを知らぬ程御熱心であつた。

先生が京都を最後に去られたのは十月二十七日の夜であります。當初東京を廻り用を足して郷里へ向はれる豫定であつたが、身體の異常に御自覺あつて單獨では心元ないとして其のまま北陸線より歸郷された。そして先生の御歸洛は例の如く間もなくであらうと御待ちして居つた

のに。先生の晩年は全く人格圓熟して慈父の如くであつた。従つて御歸郷中は何かと物足らなく御上京が一向待たれるのであつた。然し最早永久に先生の溫容に接し得ぬのは返す／＼遺憾の極みです。

先生が二十年近く住まれた小山中溝町の家が他に譲られる話に、保存し且記念したいとの希望を抱いたが、其の方策を考へた時は既に遅く契約の濟んだ後でありました。然し譲り受けた人は家の原型を損せず、又偉大な先生の住まれたことを心に銘ずるとのことは奥床しい話であります。然し先生が多年與へられた薰陶や残された數多の著書こそは永久に學界に寄與し又私共の生涯を導いて下さる事でありませう。

赤沼智善教授 主要著書・論文目録

著 書 (發行年代順)

- 一 聖典物語(山邊習學氏と共著) 明治四一年
- 二 釋尊の生涯及び其の教理(リス・デギッツの著の和譯)

明治四四年

三 七里老師語録(編著) 明治四五年

四 教行信證講義(三册、山邊氏と共著) 大正三年

五 ビガンデー氏緬甸佛傳(ビガンデー氏英譯の重譯) 大正四年

六 ウパニシヤツド(抄譯) 大正四年

七 阿含の佛敎 大正一〇年

八 眞實道 大正一〇年

九 根本佛敎の精神(中外叢書) 大正一二年

一〇 佛敎生活の理想 昭和三年

一一 漢巴四部四阿含互照錄 昭和四年

一二 印度佛敎固有名詞辭典 昭和六年

一三 阿含經講話(佛典講話二、後日本佛敎大講座の一册として刊行) 昭和六年

一四 菩薩を通じて佛敎を語る 昭和七年

一五 釋迦評傳 同 年

一六 佛敎と女性 同 年

一七 釋尊 昭和九年

一八 佛を見る眼 昭和一〇年

一九 南傳大藏經相應部第一卷(巴利文和譯) 昭和一二年

以上の外國譯一切經中には「順正理論」等の漢文延書が數部存す

本多前學長・小島・赤沼教授を偲ぶ

るも、其性質上著書とは見做しがたいから省略した。

論 文 (發表年代順)

(甲) 和文之部

一 佛敎地獄論 無盡燈二二ノ一―二 明治四〇年

二 俱舍論に現れたる小乘異部 無盡燈一三ノ二・五 明治四一年

三 釋尊最後一年の遊化地 無盡燈一九ノ七 大正三年

四 釋尊年代考 無盡燈一九ノ一〇・一一 大正三年

五 セイロン佛敎の授具足戒の作法 無盡燈二十一卷八號 大正五年

六 詩人和著舎 合掌一ノ一 大正九年

七 舍衛國及び祇園精舎の研究 佛敎研究一ノ一 大正九年

八 尼僧敎團の七相續者 合掌一ノ四・五・六・一一 大正九年

九 求法と傳道 合掌二ノ四 大正一〇年

一〇 釋尊時代印度の思想及び信仰 佛敎研究二ノ四 大正一〇年

二學 合掌三ノ一 大正一二年

- 三 釋尊の教化法 教化 大正一二年
- 三三 佛教教理上の女性觀の回轉 合掌三ノ一一 大正一二年
- 三四 如來の名義に就いて 佛教研究四ノ一 大正一二年
- 三五 空の意義に關する一考察 合掌四ノ一一 大正一二年
- 三六 漢巴雜阿含經對照研究 佛教研究五ノ一—四 大正一三年
- 三七 佛教を生かす態度 宗教と思想二ノ五 大正一三年
- 三八 教育者としての釋尊 觀照(號數不明) 大正一三年
- 三九 燃燈佛の研究 佛教研究六ノ三 大正一四年
- 四〇 十二因縁の傳統的解釋に就いて 宗教研究新二ノ一 大正一四年
- 四一 分別論者に就いて 宗教研究新二ノ五 大正一四年
- 四二 大乘運動の意義(後に大雄叢書中に刊行)現代佛教三ノ一 大正一五年
- 四三 世間的と出世間的と現代佛教 七十六號
- 四四 五濁と法滅の思想に就いて 佛教研究八ノ一 昭和二年
- 四五 般舟三昧經の研究 宗教研究新四ノ一・二 昭和二年
- 四六 釋尊の四衆に就いて 日本佛教學協會年報一 昭和三年

三 起信論の眞如に就いて 現代佛教講座一—四 昭和五年

元 經典史論(大乘)大谷學報一〇ノ一 昭和四年

元 五 蘿 論 佛教學諸問題 昭和一〇年

三 心意識に關する考察 聖語研究三 昭和一〇年

(2) 歐文之部

1 The Buddha. The Eastern Buddhist, J. 1. 1921

2 The Buddha as Preacher. FB. II. 13, 1921.

3 On the Triple Body of the Buddha. FB. II. 1 & 2. 1922.

1922.

4 A Comparative Index to the Samyukta-Nikāya

and the Samyukta-Agama. FB. III. 2—4. 1924—5

尙、遺稿に就ては此處に掲げず、それらは「赤沼智善論文集」として、近日刊行せらるゝ由なり。